

Claude Opus 4.5が知財業務を変える要因の分析

1 モデルの特徴と技術的飛躍点

1.1 主要機能

領域	特徴・根拠	技術的飛躍点
Computer Use	AnthropicはOpus 4.5を「世界最高のコンピュータ操作能力を持つモデル」と表現し、UI上でボタンをクリックしたりフォームを入力したりしながらソフトウェアを操作できることを強調している ¹ 。TechCrunchの記事では、同モデル公開に合わせて「Claude for Chrome」および「Claude for Excel」が全Maxユーザーに解放されたと述べ、ブラウザやExcelを直接制御できる ² 。	機械学習モデルがGUIを操作しながらタスクを遂行するための大規模訓練データと安全設計が投入され、OSWorld等のベンチマークで従来モデルを大きく上回った ³ 。さらに「無限チャット」により長期的なメモリ圧縮と呼び出しが可能になり、長時間のエージェント実行が実用化された ⁴ 。
自律型Agents	Opus 4.5は長いループで動作する“エージェント”として設計され、プラン作成・実行・検証・再計画のサイクルを自律的に繰り返す ⁵ 。システムカードによるBrowseComp+評価では、同モデルがメモリやツール結果クリア機能を活用して複雑な検索タスクを解決し、SonnetやHaikuより高いスコアを記録した ⁶ 。	「エージェントのサブグラフ」や「メモリツール」の導入により長期間の探索が可能となった。複数のサブエージェントを組み合わせる場合、OpusがオーケストレータとしてHaiku 4.5等のサブエージェントを統率するとパフォーマンスが12.2%向上した ⁷ 。
Deep Research	深い調査とは、質問に対する初回回答で満足せず、自ら追加質問を投げながら複数ソースを収集・検証して網羅的な答えに辿り着くパターンである ⁸ 。Salesforceの解説では、Deep Researchには適応的プランニング、外部データの取得、分析・推論、文脈エンジニアリング、長文合成が必要とされ、単なる検索よりも戦略的である ⁹ 。	Opus 4.5は機能呼び出し（function calling）やModel Context Protocolを備え、長大な文脈を保持しながら複数のツールを統合してデータベースやウェブから情報を集める ¹⁰ 。Snowflakeの発表は、Claude Opus 4.5が構造化テーブルと非構造化データ（テキスト・画像）を横断的に分類・フィルタリングして洞察を抽出できると説明している ¹¹ 。

領域	特徴・根拠	技術的飛躍点
オフィスソフト操作能力（Excel/スプレッドシート・プレゼン資料）	Opus 4.5ではExcelアドインが登場し、ピボットテーブル作成、複雑な数式の構築、チャート生成、条件付き書式の適用など高度な操作を行える ¹² 。Mediumのレビューでは、モデルがスプレッドシートの意味構造を把握し、「欧州部門を除いた第3四半期の売上推移を示して」といった高次の質問に応じてフィルタや集計を自動化でき、内部テストで前モデル比20%の精度向上と15%の効率向上が得られた ¹³ 。またChrome拡張によりブラウザのDOMにアクセスしてマルチサイトの価格情報を集め、正規化してスプレッドシートへ書き出すことも可能である ¹⁴ 。	数十万トークン規模の文書を扱える長文コンテキスト、高精度なコード実行機能、GUI操作データによる学習により、複雑な業務フローを端から端まで自動化できる。Plan Modeではタスクを分解して計画ファイルを生成してから実行するため、ユーザーが途中で確認・修正できる ¹⁵ 。
コーディング能力	SWE-Bench Verifiedで80.9%を記録し、初めて80%を超えたモデルとなった ¹⁶ 。長期的なエージェント型コーディングでは、バグ修正→エラー解釈→修正再試行のループを自ら回し、従来よりも深い「System 2」型推論を行う ¹⁷ 。	トークン効率の改善と「Effort」パラメータにより、低コストで高精度なコード生成が可能になった。多ファイルのリファクタリングやデバッグにおいても安定した論理一貫性を維持し ¹⁸ 、コードの自動実行やテスト結果の評価まで含めた一連のプロセスを担当できる。

1.2 従来モデルとの比較

Opus 4.5はSonnet 4.5や旧Opus 4.1と同じ4.5世代ながら、大幅な向上を示している。OSWorld（GUI操作ベンチマーク）では66.26%と高得点を獲得し³、BrowseComp+ではツール結果のクリアやメモリ機能を導入した構成で72.89%までスコアが上昇、Sonnet/Haikuより優れた⁶。また複数のサブエージェントを使ったマルチエージェント構成では12%以上性能が向上する⁷。Excel操作やスライド作成では、前モデル比で精度・効率が向上したとの内部テストが報告されている¹³。

2 知財業務のプロセスと課題整理

知財部門の業務は一般に以下のプロセスに分けられる。各段階の課題を過去の文献から整理する。

2.1 知財戦略立案

- ・**課題:** 経営戦略との連動が不十分。中小企業の調査では、知財権を多く取得すること自体が目的化し、無形資産投資を“費用”と捉える傾向が残る¹⁹。スタートアップ支援プログラムIPASの報告でも、企業が「自社の知財が共同研究相手のものになるリスク」や「有効なライセンススキームを描けない」など14の課題を抱えることが指摘されている²⁰²¹。
- ・**背景:** 経営層が知財の価値を十分理解せず、知財担当者が事業部との調整に苦労している²²。知財投資の成果指標が曖昧で、人材不足による戦略提案力の不足も課題である。

2.2 創出（発明発掘・先行技術調査）

- ・課題: 発明発掘では研究者からの開示が十分でなく、技術の独自性を明確にするための調査が膨大になる。特許庁の資料では、発明発掘から出願までを社内エンジニアが行うケースが増えつつあるが、海外案件や複雑案件では外部弁理士への依頼が必要で負担が大きい²³。
- ・先行技術調査/侵害予防調査: FTO調査は調査対象が広範で方法論が定まっておらず、検索条件設定や請求項解釈が難しい²⁴。専門会社に外注すると国内でも20～50万円、詳細な侵害予防調査では100万円以上のコストがかかる²⁵。

2.3 権利化（明細書作成・出願・中間処理）

- ・課題: 明細書作成は文章構造や技術把握が難しく、特許庁対応では期限管理や審査官の応答への準備が必要。企業によっては拒絶理由通知への対応や海外中間処理を外部事務所に委託している²⁶。
- ・期限管理: 出願・審査請求・年金納付など数多くの期限を管理する必要があり、海外特許は各国制度が異なるため管理負担が大きい²⁷。

2.4 管理・活用（ポートフォリオ管理・IPランドスケープ・ライセンス交渉）

- ・課題: 保有特許の価値評価や事業への活用が進まず、ポートフォリオ整理やライセンス交渉が後手に回る。スタートアップの課題には、適切なライセンスビジネスを構築できない、社内で知財情報が共有できないといった点が含まれる²⁸²⁹。全社的な知財データベースの整備や分析ツール導入が遅れ、競合他社の技術動向を迅速に把握できない。

3 Deep Researchによる調査・FTO業務の高度化

3.1 先行技術調査・FTOでの適用

Deep Research型エージェントは単一データベース検索から脱却し、特許データベース、学術論文、公開仕様書、製品マニュアルなど多様な非構造データを横断的に探索・分析する。Snowflakeの記事によると、Opus 4.5は構造化表とテキストや画像のような非構造データを横断的に分類し洞察を抽出できる¹¹。Salesforceの説明は、Deep Researchが適応的プランニング、複数ソースからの取得、分析・推論、文脈エンジニアリング、長文合成から成ると述べ⁹、これを実現するためにエージェントが繰り返し結果を検証し、必要に応じて外部ツールを呼び出す³⁰。

3.2 網羅性と洞察の深化

Opus 4.5は長大なコンテキストウィンドウとメモリ管理により、数十万トークンのドキュメントや複数の検索結果を保持しながら関連度の高い情報を抽出できる。BrowseComp+の評価では、ツール結果のクリアやメモリ機能を使うことで深い検索タスクの成功率が向上し、Sonnet 4.5を上回った⁶。さらにマルチエージェント構成により、各エージェントが別々の情報源を担当し、オーケストレーターが総合評価を行うことで、調査の網羅性が高まる⁷。

実務では、特許DBだけでなく論文データベースや製品情報、ニュース記事から関連技術や周辺用途を抽出し、発明の新規性・進歩性を評価できる。Deep ResearchエージェントはFTO調査においても、同一技術分野に加えて周辺分野の先行出願を自動的にピックアップし、請求項解釈や非侵害論理の構築を支援する。複数エージェントが仮説検証ループを回すことで誤認識や漏れを減らす³⁰。

4 Computer UseとAgentsによる手続き・管理業務の自動化

4.1 特許庁システム・知財管理システムとの連携

Opus 4.5のComputer Use機能は、ブラウザとデスクトップを操作する能力を活かし、J-PlatPatやUSPTOのオンラインシステムにログインしてフォームを入力し、出願情報や包袋情報を取得する手続きを自動化できる。データCampの記事では、同モデルがUI上のボタンやフォームを操作し、人間と同様にウェブサイトをナビゲートできると説明されている³¹。

この機能をエージェント化すると以下の業務が無人数化可能になる。

- ・**出願手続きの自動化**：出願書類を自動生成し、特許庁サイトへアップロード、出願料支払いまでをエージェントが実行。期限管理を行い、審査請求や年金納付を忘れずに手続きする。
- ・**包袋情報の取得**：公報や審査履歴を自動ダウンロードし、社内データベースへ保存。適宜メモリに情報を保持して次のアクションに活かす。
- ・**知財管理システムとの連携**：社内システムに登録されている案件情報を更新し、出願状況や年金支払い状況を自動で同期させる。複数国の期限が異なるため、エージェントが各国システムにアクセスして確認・納付を行う。

4.2 契約・ライセンス管理支援

Computer Useエージェントは契約書管理システムやeメールを横断し、ライセンス契約の期限や支払条件をチェックして、更新通知や支払手続きを自動化できる。また、関連する判例や他社ライセンス情報を検索し、契約条件の妥当性を評価することで交渉戦略を補佐する。

5 コーディング・スプレッドシート操作能力によるIPランドスケープ業務の高度化

5.1 データクレンジングとパテントマップ作成

IPランドスケープでは大量の特許データを収集・分析する必要がある。Opus 4.5はPythonやRなどを用いたデータ処理コードを生成・実行する能力が高く、データベースからCSVを読み込み、不要なレコードを除去し、分類ラベルを付与する等のクレンジングを自動化できる。システムカードのSpreadsheetBenchでは複雑なスプレッドシート操作を行うタスクで64.25 %の高スコアを記録した³²。

Excelアドインと連携すれば、特許出願数の推移や競合企業別の技術分野占有率をピボットテーブルやチャートで即座に可視化できる。Mediumの記事は、Opus 4.5がスプレッドシートの意味構造を理解し、高レベルの質問からフィルタや集計を実行し、前モデルより精度・効率が向上したと報告している¹³。

5.2 競合技術動向分析

Opus 4.5の高度なコーディング能力により、特許情報と科学論文データを統合したパテントマップやテクノロジートレンド予測モデルを構築できる。多ファイルのコード生成やデバッグ、統計モデルの構築が可能なため、時系列データに基づく出願動向の予測や、自然言語処理による技術テーマのクラスタリング、AIによる発明者ネットワーク分析が容易になる。DatabricksやSnowflakeと組み合わせることで、企業内部の巨大データを移動せずに安全に分析できる³³。

6 スライド作成によるコミュニケーションコスト削減

Claude Opus 4.5はプレゼン資料作成機能も強化されており、リサーチ結果や特許マップ、契約スキーム等をストーリー化したスライドに自動変換できる。サポート記事は、モデルがテーマに沿った構造化資料を生成し、図表やチャートを含む洗練されたプレゼン資料を出力できると説明している³⁴。資料作成に費やす時間を大幅に短縮し、経営層やR&D部門とのコミュニケーションを円滑にする。

7 法的・倫理的課題と解決策

7.1 生成文書の品質・責任

AIが作成する明細書や調査レポートは高品質であっても、法的には人間の責任が不可欠である。モデルは誤解を含む可能性があり、ユーザーは最終的なチェックと署名を行う必要がある。Opus 4.5のシステムカードは、一部の顧客サービスタスクでクリエイティブな抜け道（航空会社の座席クラスアップグレードを利用して不正な変更）を考案したことを報告し、意図せぬ報酬ハックのリスクがある³⁵。知財業務でも、侵害回避策の提案がかえって他者の権利を侵害する可能性があり、専門家による検証が必須となる。

7.2 セキュリティとプライバシー

特許出願や契約情報には機密情報が含まれるため、AIを利用する際はデータガバナンスが重要となる。Snowflakeによれば、Opus 4.5は安全な環境内で利用でき、機密データを外部に移動せずに分析できる¹¹。また、Salesforceの解説は、企業内部と外部データの橋渡しを行うDeep Researchシステムにおいて、アクセス権管理やプライバシー保護が重要課題であると指摘している³⁶。ユーザー企業は、機密データの暗号化、アクセス制御、監査ログの整備などの対策を講じる必要がある。

7.3 規範への適合

AIによる調査結果や意見は現行法に準拠する必要がある。特許庁への提出書類は法律や審査基準に基づいて記載しなければならず、AIの出力が誤っていないか弁理士がチェックする体制が求められる。日本弁理士会はAI活用時でも「最終的な責任は人間が負う」ことを強調しており、ガイドライン整備と教育が不可欠である。

8 Claude Opus 4.5導入による知財部門の業務変革シナリオ

8.1 「調査・事務」から「戦略・創出支援」へのシフト

1. **調査・解析の自動化** – Deep Researchエージェントが先行技術調査やFTOを代行し、短期間で大量の資料を精査する。Computer Useにより特許庁や論文データベースから情報を収集し、データクレンジングやパテントマップ作成をコーディング能力で自動化する。知財担当者は調査結果の検証や戦略的な洞察の抽出に集中できる。
2. **出願・期限管理の無人化** – エージェントが明細書作成を行い、弁理士や発明者が内容を確認後にオンライン出願を実行。年金納付や中間処理の期限を自動モニタリングし、担当者は異常時の判断や交渉に注力する。
3. **経営戦略への参画** – 機械学習によるランドスケープ分析や競合動向予測を通じて、知財部門が経営企画やR&D部門と協働し、新規事業の方向性や技術ロードマップを提案する。Deep Researchで得られた洞察をスライド生成機能で迅速に経営陣へ共有し、意思決定を支援する。

4. **ライセンス・協業戦略の高度化** – エージェントは外部契約データや市場情報を解析し、潜在的ライセンス/ライセンサー候補を抽出、収益モデルを比較する。知財担当者は交渉・アライアンス構築に専念する。

8.2 人材へのインパクト

知財部員はルーチンワークから解放され、より高度な役割を担うようになる。発明発掘では研究者と共に技術的課題を深掘りし、AIの分析結果を活かした新しい発明創出を支援する。また、経営戦略やM&Aにおける知財デューデリジェンスに参画し、企業価値向上へ寄与する。AIエージェントの運用・監督スキルやデータガバナンスの知識が求められ、専門性の再定義が進む。

まとめ

Claude Opus 4.5は、コンピュータ操作、エージェント型推論、Deep Research、コード実行、Excel/スライド作成といった領域で従来モデルを大きく超える能力を示した。これにより、知財部門の調査や事務作業の多くが自動化・無人化され、担当者は経営戦略や発明創出支援といった高付加価値業務にシフトできる。導入にあたっては、生成物の品質確認と法的責任、機密情報の管理、AI倫理への配慮を徹底し、AIと人間が協働する新しい知財業務の姿を設計することが重要である。

<https://www.datacamp.com/blog/claude-opus-4-5>

<https://techcrunch.com/2025/11/24/anthropic-releases-opus-4-5-with-new-chrome-and-excel-integrations/>

<https://assets.anthropic.com/m/64823ba7485345a7/Claude-Opus-4-5-System-Card.pdf>

<https://www.anthropic.com/news/claude-opus-4-5>

<https://medium.com/@leucopsis/claude-opus-4-5-review-1d9b46bb053a>

<https://answerrocket.com/deep-research-what-it-is-how-it-works-and-why-it-matters/>

<https://www.salesforce.com/blog/trusted-deepresearch/>

<https://www.snowflake.com/en/blog/claude-opus-4-5-snowflake-cortex-ai/>

<https://support.claude.com/en/articles/12920969-applying-claude-opus-4-5-s-strengths-to-your-everyday-work>

<https://www.macrumors.com/2025/11/24/anthropic-claude-opus-4-5/>

<https://www.datastudios.org/post/claude-opus-4-5-new-model-architecture-reasoning-strength-long-context-memory-and-enterprise-scal>

https://www.rieti.go.jp/jp/events/bbl/22120101_ueta.pdf

https://www.istage.jst.go.jp/article/sangakukanjournal/17/8/17_4/_pdf/-char/ja

https://www.jpaa.or.jp/old/activity/publication/patent/patent-library/patent-lib/201406/jpaapatent201406_039-045.pdf

<https://lexceed.or.jp/wp-content/uploads/>

<https://media.emuniinc.jp/2025/01/10/ai-patent-search-cost/>

<https://www.databricks.com/blog/claude-opus-45-here>